

# 闘いはまた始まったばかり

河北新報社編集局書

再び、立ち上がる！

河北新報社、東日本大震災の記録

この一年、日本社会のみならず、世界は「フタツミ」に埋め尽くされた。「ツナミ」に埋め尽くされた。二〇一一年三月十一日に発生したM9.0の巨大地震とそれによる大津波、そして福島第一原子力発電所事故は死者、行方不明者の数もさることながら、われわれの文明に大きなインパクトを与えたように思う。

## 震災に見舞われた人々からほとばしる言葉を後世に残すために

鈴木 雄 雅

本書は前作にあたる『河北新報のいちばん長い日―震災下の地元紙』(文藝春秋、二〇一一年)に続いて、河北新報社の善した作品である。

本書に綴られた内容は、前書が震災直後に河北新報社が百年を超える紙歴のなかでかつて経験のない難局のなか新聞発行を行ったかを描いた新聞人のドキュメントであるのとは大きく異なる。

巻くなかで、そのメッセージはどれだけ重くのしかかり、届くものであろうか。

「生きてほしい」―三月十三日付社説で始まる本書は、未曾有の天災に直面した人々がどのような行動をとったのか、どのように感じ、どのような結末を導いたかを描く。記者の目線は、過剰な修飾語や紋切り型で

た人、助からなかった人、津波が押し寄せたなか救出された人、救出されなかった人たちがそこにいた事実と生々しい現実を。職責を全うしようとして命を落とした人々がいたことを忘れてはならないと訴える。

元産経新聞編集局長だった青木彰は、「どんな時代でも、新聞記者の仕事は人々の旅であり、人々の喜び、悲しみ、苦しみを通して、生きる尊厳を学べると考えている。その生き尊厳を守ることが、草書

もない、ありのままの事実を伝えている。何が起きたのか、何が起きているのか、指定避難所へ逃げて助かった

「状況を丹念に記録し検証すると同時に、数えきれない人たちが悲しみの淵からはい上がり困難に立ち向かっていくこと、そして地域の復興、再生を願っている。こうした軌跡―記事を編み直したのが、この著作である」(巻頭言)。

この一年を経て、復興、再生にメディアがどのように立ち向かうのか。報道とは「伝えること」ではなく、訴えること(黒田清、元大阪読売社会部長)である。訴える相手は誰なのか。闘いはまた始まったばかりである。(すずき・ゆうが氏)上智大学文学部教授・新聞学専攻)

★「河北新報」は一八九七(明治30)年創刊。宮城県を中心に東北六県を発行区域とし、創刊以来、一東北振興―を社是に。取材記者約三〇〇名。東日本大震災で甚大な被害にあいながらも、「被災者に寄り添う」という編集方針を貫き、被災地の実態、前向きに生きる人々の姿を丹念に伝え続けている。「東日本大震災」報道で新聞協会賞、菊池賞を受賞。



再び、立ち上がる！  
四六判・319頁・1575円  
筑摩書房  
978-4-480-81833-1